

1/14 Wed.

第688回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.688 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor

ヴァイオリン
Violin

チェロ
Cello

コンサートマスター
Guest Concertmaster

ブラームス
BRAHMS

ブラームス
BRAHMS

[休憩]
[Intermission]

ブラームス
BRAHMS

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.7
SEBASTIAN WEIGLE

林 悠介 (読響第1コンサートマスター) -p.8
YUSUKE HAYASHI (YNSO First Concertmaster)

遠藤真理 (読響ソロ・チェロ) -p.8
MARI ENDO (YNSO Solo Cello)

小森谷 巧 (ゲスト)
TAKUMI KOMORIYA

悲劇的序曲 作品81 [約13分] -p.14
Tragic Overture, op. 81

ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲
イ短調 作品102 [約32分] -p.15
Double Concerto for Violin and Cello in A minor, op. 102
I. Allegro
II. Andante
III. Vivace non troppo

交響曲 第3番 ヘ長調 作品90 [約33分] -p.16
Symphony No.3 in F major, op. 90
I. Allegro con brio
II. Andante
III. Poco allegretto
IV. Allegro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会
協賛：大成建設株式会社
※本公演では日本テレビの収録が行われます。

1/20 Tue.

第654回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.654 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor

ソプラノ
Soprano

メゾ・ソプラノ
Mezzo Soprano

テノール
Tenor

バス
Bass

合唱
Chorus

合唱指揮
Chorusmaster

第1コンサートマスター
First Concertmaster

プフィッツナー
PFITZNER

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.7
SEBASTIAN WEIGLE

マグダレーナ・ヒンタードブラー -p.9
MAGDALENA HINTERDOBLER

クラウディア・マーンケ -p.9
CLAUDIA MAHNKE

シュテファン・リュウガマー -p.10
STEPHAN RÜGAMER

クワンチュル・ユン -p.10
KWANGCHUL YOUN

新国立劇場合唱団 -p.11
NEW NATIONAL THEATRE CHORUS

富平恭平 -p.11
KYOHEI TOMIHIRA

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

カンタータ〈ドイツ精神について〉 作品28
(日本初演) -p.18
Von deutscher Seele op. 28 (Japan Premiere)

第1部：人間と自然 [約46分]
Part 1: Mensch und Natur

1. Es geht wohl anders, als du meinst
2. Tod als Postillon
3. Was willst du auf dieser Station
4. Herz, in deinen sonnenhellen Tagen
5. Der Sturm geht lärmend um das Haus
6. "Abend"
7. "Nacht"
8. Die Lerche grüßt den ersten Strahl
9. Wenn der Hahn kräht auf dem Dache
10. Ewig muntres Spiel der Wogen
11. Der Wanderer von der Heimat weit
12. Nachtgruß: "Weil jetzo alles Stille ist"

第2部：生と歌 [約22分]

Part 2: Leben und Singen

13. Instrumentalvorspiel
14. Wir wandern nun schon viel hundert Jahr'
15. Was ich wollte, liegt zerschlagen
16. "Ergebung"
17. Der jagd dahin, daß die Rosse schnaufen
18. Gleichwie auf dunklem Grunde

歌曲部分 [約26分]

Der Liederteil

19. Der alte Garten: "Kaiserkron' und Päonien rot"
20. Spruch: "Von allen guten Schwingen"
21. Die Nonne und der Ritter: "Da die Welt zur Ruh gegangen"
22. Intermezzo: "Wohl vor lauter Singen"
23. Der Friedensbote: "Schlaf ein, mein Liebchen"
24. Schlußgesang: "Wenn die Wogen unten toben"

合唱稽古ピアノ：古瀬安子

字幕：前原拓也

字幕操作：Zimaku プラス

※本公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。

*No intermission

※当初の発表から、出演者が一部変更になりました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））

文化庁

独立行政法人日本芸術文化振興会

公益財団法人アフィニス文化財団

公益財団法人花王 芸術・科学財団

公益財団法人三菱UFJ信託芸術文化財団

協力：アフラック生命保険株式会社



1/24 Sat.

第283回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.283 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

1/25 Sun.

第283回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.283 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Principal Conductor

ヴァイオリン
Violin

第1コンサートマスター
First Concertmaster

エミーリエ・マイヤー
MAYER

シューマン
SCHUMANN

[休憩]
[Intermission]

メンデルスゾーン
MENDELSSOHN

セバスティアン・ヴァイグレ（常任指揮者）-p.7
SEBASTIAN WEIGLE

イザベル・ファウスト -p.12
ISABELLE FAUST

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

〈ファウスト〉序曲 [約12分] -p.21
"Faust" Overture

ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 [約33分] -p.22
Violin Concerto in D minor

- I. In Kräftigem, nicht zu schnellem Tempo
- II. Langsam – III. Lebhaft, doch nicht schnell

交響曲 第3番 イ短調 作品56 〈スコットランド〉
[約40分] -p.23

Symphony No. 3 in A minor, op. 56 "Scottish"

- I. Andante con moto – Allegro un poco agitato
- II. Vivace non troppo
- II. Adagio
- IV. Allegro vivacissimo – Allegro maestoso assai

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））

文化庁

独立行政法人日本芸術文化振興会

芸劇&読響ジュニア・アンサンブル・アカデミー プレ・コンサート

1月25日(日)の《第283回 日曜マチネーシリーズ》では、開演前の13時25分から、「芸劇&読響ジュニア・アンサンブル・アカデミー」の受講生によるプレ・コンサートをコンサートホールで開催します。

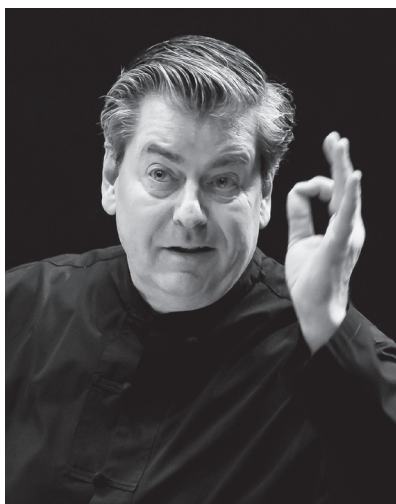
指揮

セバスティアン・ヴァイグレ

(常任指揮者)

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

名匠ヴァイグレが ドイツ・ロマン派音楽の 神髄に迫る!



©読響

常任指揮者ヴァイグレが今シーズンの目玉公演として、プフィッツナーの壮大なカンタータ〈ドイツ精神について〉のほか、ブラームス、メンデルスゾーンなどドイツ音楽による3つのプログラムを指揮し、巧みな構成力とドラマティックな表現力を発揮する。

1961年ベルリン生まれ。82年にベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者となった後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者へ転身。2003年には、ドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれ注目を浴び、04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務めた。08年から23年夏までフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務め、在任期間中には同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に、同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に度々輝くなど、その手腕は高く評価された。

読響には16年8月に初登場し、19年から第10代常任指揮者を務めている。近年もメトロポリタン歌劇場で〈ポリス・ゴドゥノフ〉、ウィーン国立歌劇場で〈ダフネ〉、バイエルン国立歌劇場で〈影のない女〉〈ローエングリン〉を指揮するなど国際的な活躍を続ける。23年7月には、フランクフルト歌劇場の音楽総監督としての最後の公演でルディ・シュテファン〈最初の人類〉を振り、大きな話題を呼んだ。昨年3月には読響と〈ヴォツェック〉を披露して絶賛された。これまでにバイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭のほか、ベルリン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラなどに客演。昨年3月にはベルリン・フィルにデビューしたほか、ベルリン放送響、ウィーン響、フランクフルト放送響などの一流楽団と共演を重ねている。

1/14
名曲

1/20
定期

1/24
土曜マチネー

1/25
日曜マチネー

Maestro



©田頭真理子

ヴァイオリン

林 悠介

(読響第1コンサートマスター)

YUSUKE HAYASHI
(YNSO First Concertmaster),
Violin

ドイツでの豊富な経験と知性あふれる演奏で読響を牽引する名手。ウィーン国立音楽大学、同修士課程を最優秀で修了。プレシア国際コンクールでの日本人初の優勝、ニールセン国際コンクール第2位、ハノーファー国際コンクール入賞など受賞歴多数。チリ国立響、パドヴァ・ヴェネト管、プレシア室内管と共演し、好評を博している。2014年までノイエ・ヴェストファーレンフィルの第1コンサートマスター、14年から17年までハノーファー北ドイツ放送フィルの副コンサートマスター、17年から21年までヴッパータール響の第1コンサートマスターを務めた。21年4月に読響のコンサートマスターに就任。25年4月からは第1コンサートマスターを務め、常任指揮者ヴァイグレからも高い信頼を得ている。現在、東京芸術大学弦楽科非常勤講師。

豊かな歌心と温かな音色で聴く者を魅了する日本を代表するチェリスト。2017年から読響ソロ・チェロ奏者を務めている。東京芸術大学を首席で卒業後、オーストリアのザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学の修士課程を最高点で修了。日本音楽コンクール優勝、エンリコ・マイナルディ国際コンクール第2位など受賞多数。齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。これまでにG.ボッセ、J=P.ヴァレーズ、モルロー、小林研一郎、山田和樹らの指揮で、ウィーン室内管やプラハ響など国内外の楽団と数多く共演し、高い評価を得ている。CDはエイベックス・クラシックスからリリースされ、NHK大河ドラマや映画音楽の演奏のほか、2012年から8年間NHK-FM「きらくら!」のパーソナリティを務めるなど幅広く活躍中。



©Yuji Hori

チェロ

遠藤真理

(読響ソロ・チェロ)

MARI ENDO (YNSO Solo Cello),
Cello

©Simon Pauly

ソプラノ

**マグダレーナ・
ヒンタードブラー**MAGDALENA HINTERDOBLER,
Soprano

力強く伸びやかな美声を持つ歌姫。ドイツ・シュトラウピング出身。ミュンヘン音楽大学およびバイエルン演劇アカデミーで研鑽^{けんさん}を積み、2023年からフランクフルト歌劇場の専属歌手として〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉エファ、〈ドン・カルロ〉エリザベッタなどを歌い絶賛された。近年はベルリン・ドイツ・オペラ、ライプツィヒ歌劇場、ケルン歌劇場などに客演。今シーズンはザルツブルクのフェルゼンライトシュレーで〈さまよえるオランダ人〉ゼンタを歌うなど活躍の場を広げている。また、リリコ・ドラマティコ・ソプラノとして、ミュンヘン放送管、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、バンベルク響、ドレスデン・フィルなどと共演。各地で歌曲のリサイタルを開催している。読響初登場。

温かく多彩な声で世界的に活躍しているドイツを代表するメゾ・ソプラノ。ドレスデン音楽大学で学び、1996年から2006年までシュトゥットガルト歌劇場に所属。06年からフランクフルト歌劇場の専属歌手を務め、21年にはフランクフルト市から“宮廷歌手”の称号を贈られた。ウィーン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、ベルリン国立歌劇場、ハンブルク国立歌劇場、バイロイト音楽祭などで幅広いレパートリーを歌い、好評を博している。21年にはパッパノー指揮〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉マグダレーネでメトロポリタン歌劇場にデビューした。読響とは15年〈トリスタンとイゾルデ〉ブランゲエネ、19年〈グレの歌〉でカンブルラン指揮のもとで共演し、魅力あふれる歌声で会場を沸かせた。



©Monika Rittershaus

メゾ・ソプラノ

クラウディア・マーンケCLAUDIA MAHNKE,
Mezzo Soprano



©Simon Pauly

テノール

**シュテファン・
リューガマー**

STEPHAN RÜGAMER, Tenor

幅広いレパートリーと明瞭かつ豊かな声で世界の檜舞台で活躍するテノール。ドイツ・ヴァルトザッセン出身。ヴュルツブルクとリューベックにて学んだ後に、リリコ・テノールとしてリューベック歌劇場でキャリアを開始。バレンボイム指揮〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉ダーヴィットでベルリン国立歌劇場にデビューして以降、ミラノ・スカラ座、ハンブルク国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、パリ・オペラ座、シュトゥットガルト歌劇場など世界の主要歌劇場に出演。プーレーズ、ドホナーニ、ギーレン、メッツマッハーらの世界的指揮者のもとで著名楽団と共演し、ザルツブルク音楽祭、ルツェルン音楽祭などにも出演している。2024年にはヴァイグレ指揮・読響と〈エレクトラ〉エギストで共演し、高い評価を得た。

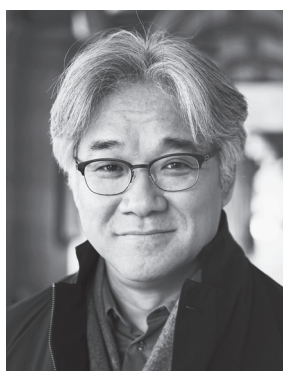
合唱

新国立劇場合唱団

NEW NATIONAL THEATRE CHORUS, Chorus

1997年にオープンした新国立劇場で、オペラ公演のための合唱団として活動を開始。厳正な審査によって選ばれるメンバーは100名を超え、新国立劇場が上演する多様なオペラ公演を通じて、年々レパートリーを増やしている。個々のメンバーは高水準の歌唱力と優れた演技力を有しており、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量を誇る。その確かな実力で、公演ごとに共演する出演者、指揮者、演出家をはじめ、国内外のメディアからも高い評価を得ている。2007年以来、読響の〈第九〉公演に出演するほか、17年のメシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉、23年のアイスラー〈ドイツ交響曲〉、25年3月のベルク〈ヴォツェック〉などで見事な歌唱を披露し、絶賛を博した。

貫禄のある朗々と響く声で世界を代表するバス歌手。韓国出身。1993～2004年までベルリン国立歌劇場の専属歌手として幅広いレパートリーで活躍し、18年には同劇場から宮廷歌手の称号を与えられた。ウィーン国立歌劇場、メトロポリタン歌劇場、ハンブルク歌劇場、パリ・オペラ座など主要歌劇場で〈魔笛〉ザラストロ、〈トリスタンとイゾルデ〉マルケ王、〈ワルキューレ〉フンディング、〈ローエングリン〉ハインリッヒ王、〈アイダ〉ランフィスなどを歌い、バイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭などにも出演。近年は、バーデン＝バーデン・イースター音楽祭でペトレンコ指揮ベルリン・フィルと共演して好評を得たほか、サンフランシスコ・オペラでの〈パルジファル〉グルネマンツでも成功を収めた。読響初登場。



バス

クワンチュル・ユン

KWANGCHUL YOUN, Bass



合唱指揮

富平恭平KYOEI TOMIHIRA,
Chorusmaster

東京都出身。東京芸術大学指揮科卒業。指揮を高関健、田中良和、小田野宏之に師事。東京二期会、新国立劇場、藤原歌劇団、日生劇場などのオペラ公演で副指揮、合唱指揮、コレペティートルを務めた。これまでに、〈フィガロの結婚〉〈椿姫〉〈パルジファル〉〈カルメン〉〈ばらの騎士〉〈ルル〉など、多数のオペラを手がけている。読響では2017年の〈アッシジの聖フランチェスコ〉、22年の〈ドイツ・レクイエム〉などで新国立劇場合唱団の合唱指揮を務め、好評を博した。群馬響、東京シティ・フィル、東京フィル、東京響などにも客演。東京二期会音楽スタッフ、新国立劇場音楽スタッフなどを経て、19年4月に新国立劇場合唱指揮者に就任。洗足学園音楽大学非常勤講師。

1/24

土曜マチネー

1/25

日曜マチネー

Artist



©Felix Broede

ヴァイオリン

イザベル・ファウスト

ISABELLE FAUST, Violin

深い洞察と豊かな知性を併せ持つ現代最高峰のヴァイオリニスト。レオポルト・モーツァルト・コンクールおよびパガニーニ国際コンクールで優勝し大きな話題を呼ぶ。アバド、ラトル、ネルソンス、アントニーニ、ロト、ハーディング、ヘレヴェッヘ、カンブルランら名匠の指揮で、ベルリン・フィル、バイエルン放送響、ボストン響、ロンドン響、ルツェルン祝祭管、フライブルク・バロック・オーケストラなど世界の主要楽団と数多く共演し、絶賛を浴びる。室内楽にも活動の幅を広げており、ザルツブルク音楽祭などに出演し好評を博している。CDはハルモニア・ムンディより多くの名演をリリースし、ディアパソン・ドール賞、グラモフォン賞など受賞多数。読響とは2018年以来、2度目の共演。

ブラームス 悲劇的序曲 作品81

音楽史でロマン派とよばれる時期のど真ん中、1853年。ロベルト・シューマンのあと押しを得て、ヨハネス・ブラームス（1833～97）が20歳で世に紹介された時、彼には管弦楽曲がまだなかった。その方面へとシューマンに鼓舞され、最初にもしたのはピアノ協奏曲第1番（1858）だった。管弦楽のパートは、人の助けを得て仕上げた。そして〈ドイツ・レクイエム〉（1868）の成功が突破口となり、43歳のときに交響曲第1番を完成。これから聴く〈悲劇的序曲〉はその4年後、1880年夏の作である。初演は同年12月26日、ウィーンにて。

「序曲」には、オペラなど劇音楽の冒頭に置かれるものと、コンサート用の単独曲として書かれるものがあるが、本作は後者にあたる。完成がほぼ同時期であることから、〈大学祝典序曲〉の姉妹編とみなされることが多い。ブラームス自身、「とても愉快的」〈大学祝典〉を書いたついでに「私のメランコリックな心性をも満足させてやりたかったのだ」と述べているので、そういう見方になるのだろう。

ただ、本作のスケッチの一部はすでに1860年代終わり頃に書かれており、この発言を鵜呑みにすることはできない。両序曲をセットで世に知らしめるべく、姉妹編に見せかけたというのが事の真相かもしれない。

叩きつけるような二つの和音で始まるが、この時点ではこれが二短調なのかイ短調なのか判然としない。この宙吊り状態はしばらく続き、20小節も経ってから二短調が確定する。もがくような楽想展開、歯を食いしばるがごとき付点リズムの多用は、たしかに「悲劇的」のイメージにぴったりだ。

〈船木篤也 音楽評論〉

作曲：1880年夏／初演：1880年12月26日、ウィーン／演奏時間：約13分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

ブラームス ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲 イ短調 作品102

「ヘンな思いつき」。ブラームスはこのヴァイオリンとチェロのための協奏曲を書き進めるあいだ、幾度となくそう述べた。ヨハン・クリスティアン・バッハや、ルイ・シュポーアらが書いたこの編成による前例作を、知らなかったのだろうか？

いずれにせよ、ブラームスには、いっぶう変わった作品に挑んでいるという自覚があった。それだけに、筆致は彼が書いたピアノ協奏曲やヴァイオリン協奏曲とは異なる点が多い。

関係がこの間ぎくしゃくしていた旧知の名ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムと仲なおりをするために本作は書かれた、という説がある。実際、終楽章のヴァイオリン・パートが「もっと楽しくならないものか」と、ブラームスはヨアヒムに相談している。しかし作曲のきっかけそのものは、むしろチェリストのロベルト・ハウスマンから与えられたようだ。1887年の初演は、ヴァイオリン、チェロ、それぞれの独奏者に、この二人があてがわれ行われた。ブラームスが没するのはその10年後の1897年だが、彼が書いた管弦楽曲は、結局これが最後のものとなった。

第1楽章 管弦楽による短い序奏（主要主題の断片）ののち、早くも独奏楽器の見せ場がくる。ここはチェロだけで、「朗唱のモードで、ただしテンポを保って」とある。次に管楽器による短い間奏（副主題の断片）があり、それがやむとヴァイオリン独奏が入る。やがて二つの独奏楽器が絡み合い、高揚。そうして初めて、主要主題の全容がオーケストラで力奏される。

第2楽章 A-B-A'の3部形式。冒頭は、管楽器が4度ずつ「ラーレ」「ミーラ」と上がって、1オクターヴ上がる。独奏者二人で始めるロマンあふれるA部の主題は、この音運動を基にしている。

第3楽章 A-B-A'-C-A"-B'-A"'のロンドソナタ形式で、その舞踊風、ハンガリー風の音楽は、ブラームス自身のヴァイオリン協奏曲にも通じるだろう。

〈船木篤也 音楽評論〉

作曲：1887年夏／初演：1887年10月18日、ケルン／演奏時間：約32分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン、独奏チェロ

ブラームス

交響曲 第3番 ヘ長調 作品90

奇しくも、楽劇の巨人ワーグナーが没した1883年に書かれている。当時、ブラームスの暮らすウィーンの批評界は、ワーグナー派VSブラームス派に二分されていた。ワーグナー派はブラームスの何を難じたのか？ 批評家でもあった作曲家フーゴー・ヴォルフは、交響曲第3番についてこう述べている。「歯がみな抜けてヨロヨロの皺^{しわ}くちや、ガタガタになった老婆のような古きよき時代を、ブラームスは思っている」。

ずい分な言いようだが、なるほど、そこそこで聴かれる民謡風の旋律などは、保守的と映るかもしれない。あるいはベートーヴェン以来の、モチーフや主題の楽章横断的な「関連づけ」の技も。しかし民謡風の旋律であっても、ブラームスの場合民謡の定石である4小節+4小節で出来ているとは限らない。「関連付け」にしてもかなり独特だ。たとえば第1楽章冒頭のモチーフ「ファ-ラー-ファ」。その後も現れるものだが、ここに施されたハーモニーは長調と短調のあいだを揺らぐ。モチーフそのものより、この「揺らぎ」が、交響曲全体の基調になっているのだ。伝統を意図的にずらし、拡張する。それこそがブラームスの真骨頂である。

第1楽章 先のモチーフに続く旋律は、シューマンの交響曲第3番〈ライン〉冒頭の旋律に（リズムが）よく似ている。本作が書かれたヴィースバーデンはライン川沿いの町だから、亡き恩人にオマージュを捧げたのかもしれない。これが落ち着くと、民謡風の第2主題がクラリネットに現れる。

第2楽章 クラリネットとファゴットが、これもまた民謡風の旋律を吹いて始まる。続いて吹く3連符を含む第2主題は、第4楽章で大活躍することになる。

第3楽章 3拍子であるが、メランコリックな歌からなる点、伝統的な交響曲の舞踊系第3楽章と異なる。

第4楽章 エネルギッシュに盛り上がって、静かに終わる変わり種フィナーレ。

〈船木篤也 音楽評論〉

作曲：1883年5～10月／初演：1883年12月2日、ウィーン／演奏時間：約33分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

プフィッツナー

カンタータ〈ドイツ精神について〉 作品28 (日本初演)

ロベルト・シューマン (1810~56) やヨハネス・ブラームス (1833~97)、そしてフーゴ・ヴォルフ (1860~1903) をはじめ、多くの作曲家がヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ (1788~1857) の詩に作曲していたが、ハンス・プフィッツナー (1869~1949) ほどこの詩人を深く愛した作曲家はいなかったかも知れない。シューマンにとっては自然を愛でる詩人、ヴォルフにとってはユーモアを秘めた詩人であったアイヒェンドルフは、プフィッツナーにとってドイツの愛国詩人と映っていた。

若い頃からこの詩人の詩に作曲していたプフィッツナーは、単に個別の詩につけた歌曲を創作するのではなく、大きなまとまりを持つ作品に仕上げようという構想を、ストラスブル時代を抱くようになる。彼は1908年から一家とともにこの街に移り住み、市立音楽院と市のオーケストラ、そしてオペラにも指導的な地位を築くが、第一次世界大戦によるドイツの敗北でこの街がフランス領になるやいなや、それらすべてを失ってミュンヘンに退去し、しばらくは家族とともに転居を繰り返す生活を強いられるようになった。1919年によくアンマー湖畔のショーンドルフに一家が落ち着くと、プフィッツナーにも構想を練る時間が蘇ったが、この経験と、その背景となるヴェルサイユ体制は、彼のなかのドイツ・ナショナリズムを強める要因となった。まさにそうした時期である1920年から21年にこのカンタータ〈ドイツ精神について〉は書かれることになる。

プフィッツナーにとって、音楽の根幹は霊感的な着想としての旋律という単位であったが、大きな構成を持つ作品は、詩によって方向付けがなされるのであり、その反対ではなかった。緻密な動機労作や十二音技法のように、同時期の無調音楽が案出した、全体を有機的に構造化するための音楽の形成力は基本的に考えられていないので、作品はテキストの配列とそれに伴う音楽のモザイクによって構成される。彼自身はこの作品を「1本の紐で結ばれた、魔法のようなイメージの連なり」と呼んだが、その相貌はとりとめもない印象を与えもするだろう。

ここでプフィッツナーは、アイヒェンドルフの『旅の格言 Wandersprüche』という7つの部分からなる詩を第1部「人間と自然」の、そして『宗教詩集』からの詩

を第2部前半の「生と歌」、さらに『ロマンツェ』と『歌手の生』を後半の「歌曲部分」の主たるテキストとして用い、その他の詩をも交えて、4人の独唱者、混声合唱とオーケストラとオルガンのための大作に仕立て上げた。副題の「ロマンティック・カンタータ romantische Kantate」というジャンルがそれまでにあったわけではない。これはオラトリオのように物語を持つわけでもなく、宗教カンタータでも世俗カンタータでもなく、それでもオーケストラ伴奏で独唱も合唱も入るというこの作品に、ロマン派詩人アイヒェンドルフの詩が用いられていることへのプフィッツナーなりの主張である (彼自身はカンタータのドイツ語訳 Singstück を用いてもよかったと書いている)。

アイヒェンドルフの詩は、この詩人の包括的な像を結ばせようとするプフィッツナーの意図で選ばれており、創作中にたびたび選択の変更がなされている。プフィッツナーがこだわったのは歌唱部分だけではなく、それと緊密に関わり合うオーケストラだけの〈間奏曲〉であった。それらは密にテキストと結ばれている。例えば、第1曲後半のテノール独唱による〈この駅に何を望む〉のなかの郵便の角笛 (ポストホルン) の詩行を受けて、続く間奏曲〈郵便としての死〉の不気味に異形で、この作曲家には珍しい複雑な音響が続き、その果てに再び〈この駅に何を望む〉以下のテキストがバスとアルトの二重唱と、続く合唱、さらにソプラノ独唱に戻ってくる (第2曲) という構成は、テキストと音楽を巧妙に絡ませるプフィッツナー独特のものであり、音楽だけの構成を見定めようとする足すくわれることになる。あくまでもテキストが主体である。そして2曲の歌のあと、アイヒェンドルフ詩の重要な要素である「夕べ」と「夜」がまた連続する〈間奏曲〉として続き、さざめくハーブの音、ホルンの呼び声、漂う旋律が、小川や森、岩肌といった情景を織りなしていくが、それはやがて夜明けの鶯の啼き声や雄鳥の雄叫びによって断ち切られる。第1部の最後の2曲では間奏曲の素材が呼び戻され、ことに最終曲〈夜の挨拶〉では静かに、しかし荘厳なクライマックスが築かれていく。

『宗教詩集』の「われら今や幾百年の歳月を歩みし」の詩で始まる第2部を導く

長い〈前奏曲〉も、そのあとひとつしかない〈間奏曲〉を補うものだろう。「恭順 Ergebung」と名付けられたその間奏曲には、プフィツナーが愛した思想家ショーペンハウアーからの影響が認められる。そしてそれに続く2曲と、最後の「歌曲部分」の、長い詩がほとんどの5曲、およびこれまでの音楽的な動機が再帰する『宗教詩集』による壮大な〈最後の歌〉では、詩人のより多彩な側面が、まさに万物に宿る歌を蘇らせるように網羅されていく。

最後から2番目の詩「平和の使者」の末尾に高らかに歌われる詩行「この国は今や自由なのだ!」は、やはりヴェルサイユ体制に批判的であったプフィツナーの生の声であろう。〈ドイツ精神について〉というタイトルは、当初出版社フルストナーが懸念したが、最終的に採用され、またヒトラー時代にはむしろ好まれもして、第二次世界大戦後の否定的な評価につながった。プフィツナーにとっての「ドイツ精神」とは、本来政治的なものではなく、ときに瞑想的で、ときに高揚し、厳粛で、甘美なほど力強く、英雄的なものに過ぎなかったが、時代はそれを危ぶむことも称揚することもできたのである。

〈長木誠司 音楽評論家〉

作曲：1920～21年／初演：1922年1月27日、ベルリン／演奏時間：第1部 約46分、第2部 約22分、歌曲部分 約26分

楽器編成／フルート2、ピッコロ2、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3（エスクラリネット持替）、エスクラリネット（バスクラリネット持替）、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン6、トランペット4、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、スレイベル、鞭、銅鑼、鐘）、ハープ2、ギター、パイプオルガン、弦五部、独唱（ソプラノ、メゾ・ソプラノ、テノール、バス）、合唱

エミーリエ・マイヤー 〈ファウスト〉序曲

エミーリエ・マイヤー（1812～83）は、メンデルスゾーンの姉ファニー（1805～47）やシューマンの妻クララ（1819～96）に並ぶ優れた才能が近年脚光を浴び、再評価が進む女性作曲家である。ドイツのフリーラントで薬局を経営する両親のもとに生まれ、5歳でピアノを始めて才能を発揮するも、音楽は良家の女子の嗜好にとどめられ、早くに亡くなった母親の代わりに家族を支えた。1840年に父親が他界し、多額の遺産を手にとると、国境に近いシュテティーン（現在のポーランド領）に移り、同地の音楽監督で、メンデルスゾーンとも親しい作曲家カール・レーヴェ（1796～1869）に師事し、1842年に最初の作品を書き上げた。1847年に最初の2曲の交響曲が初演されると、レーヴェの勧めで、ベルリンのA.B.マルクス（1795～1866）のもとでさらに勉強を続けた。マルクスは、楽式論の大家として4巻の作曲論や19世紀の代表的なベートーヴェン論を残したことで知られる作曲家・音楽学者である。その影響を受けたマイヤーは、8曲の交響曲と15曲の演奏会用序曲をはじめ、室内楽曲や歌曲、ピアノ曲など数多くの作品を残した。

〈ファウスト〉序曲は、最晩年の1880年にゲーテの大作『ファウスト』から着想を得て書かれた。ファウストの^{かいじょう}晦渋な性格を表すかのように、3本のトロンボーン（テノール2、バス）とチューバで低音が強化されている。ゆるやかな序奏はファゴットと低弦で静かに始まり、快活な主部は勇ましい主題と優美な主題が示される。管楽器のコラールを経て主題が再現され、最後に口長調に転じて堂々と結ばれる。楽譜にはコードとなる練習番号Nに「Sie ist gerettet」と記されている。これは『ファウスト』第1部の最後で、天上からの声が語りかける「彼女（グレートヒェン）は救われた」による。翌年の初演は成功を収め、作品は、後のロシア皇帝アレクサンドル3世との恋愛で知られ、若くして世を去ったマリア・メシュチェルスカヤ公女に献呈された。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1880年／初演：1881年3月、ベルリン／演奏時間：約12分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

1/24
土曜マチネー1/25
日曜マチネー

Program Notes

シューマン

ヴァイオリン協奏曲 ニ短調

ロベルト・シューマン（1810～56）のヴァイオリン協奏曲は、作曲家の生前に演奏されることはなかった。シューマンは、ライプツィヒ音楽院で学びメンデルスゾーンに見出されたハンガリーの若きヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒム（1831～1907）の才能を高く評価し、彼に初演を託したいと考えていた。1853年10月、シューマンが音楽監督を務めるデュッセルドルフ市音楽協会の定期演奏会で書き上げたばかりの協奏曲をヨアヒムの独奏で初演する予定だったが、理由は不明のまま別の作品に差し替えられた。

その4か月後、シューマンは精神の病からライン川に身を投げ、療養に努めたが1856年に亡くなった。シューマンの妻クララとヨアヒムは、引き続きこの協奏曲の演奏の可能性を探るも実現せず、楽譜はヨアヒムの蔵書とともにベルリン州立図書館に収蔵された。その作品に光が当てられたのは、20世紀に入ってからで、1937年に楽譜が発見されると、すぐさまゲオルク・クーレンカンプの独奏、カール・ベーム指揮ベルリン・フィルによって初演された。

第1楽章 力強く、あまり速すぎない速度で 協奏風ソナタ形式。オーケストラで2つの主題が提示された後、独奏ヴァイオリンが力強く駆け上がる第1主題と滑らかなへ長調の第2主題を奏する。独奏ヴァイオリンは技巧的に活躍する。

第2楽章 ゆるやかに 穏やかな緩徐楽章。序奏に続いて独奏ヴァイオリンが歌う温かい旋律は、シューマンが「夢の中に天使が現れて歌った」としたもの。この「天使の主題」は、ピアノのための〈主題と変奏〉（1864）でも使われた。

第3楽章 生き生きと、しかし急速でなく ロンド形式。ポロネーズのリズムにのせて独奏ヴァイオリンの勇壮なロンド主題を中心に、優美な副主題や新しい素材をはさみながら華やかに盛り上がる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1853年9月21日～10月3日／初演：1937年11月26日、ベルリン／演奏時間：約33分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

メンデルスゾーン

交響曲 第3番 イ短調 作品56〈スコットランド〉

フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）の交響曲は、番号付きの5曲がよく知られている。この番号は楽譜が出版された順番で、第3番は、第1番に続いて着手されたものの書き上げるまで長い年月を要し、実際には作曲家が完成させた最後の交響曲となった。最初に着想を得たのは、1829年にエディンバラのホリールード宮殿を観光で訪れたときで、ベルリンの家族に宛てた手紙に「私のスコットランド交響曲の始まりを見つけました」と記している。その後、1830年代を通じて作曲を試みるが進展せず、1841年夏から本格的に作曲が開始された。

メンデルスゾーンは、同じ年、ベルリン宮廷礼拝堂楽長に就任した。1835年から務めるライプツィヒ・ゲヴァントハウス管の音楽監督との兼務で多忙ではあったが、作曲は順調に進み、翌年春に作曲者自身の指揮で初演された。4つの楽章は、切れ目なく演奏するように指示されている。

第1楽章 長大な序奏の寂しげな冒頭は、廃墟のホリールード宮殿を訪れた際に書きとめた作曲のスケッチと一致する。ソナタ形式の主部は、序奏主題に由来する第1主題とクラリネットによる第2主題が示される。展開部は第1主題の素材を用いた「嵐の場面」で始まる。再現部を経て、序奏の再現で密やかに結ばれる。

第2楽章 ソナタ形式とロンド形式の要素を組み合わせた軽快なスケルツォ楽章。クラリネットが民謡風の主要主題を歌い上げ、静かな副主題と対比させられる。

第3楽章 壮大な緩徐楽章。弦楽器による穏やかで甘美な主題と木管楽器による葬送行進曲風の主題が反復しながら交替する。

第4楽章 ソナタ形式。鋭角的な第1主題と、オーボエによるスコットランドの荒涼とした風景を思わせる第2主題が展開する。再現部の後に置かれたイ長調の後奏は第1楽章の序奏から派生した新しい主題で、高らかに歌われ堂々と結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1829～42年／初演：1842年3月3日、ライプツィヒ／演奏時間：約40分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部

1/24
土曜マチネー1/25
日曜マチネー

Program Notes